

二つの c'est と指示の問題

川 島 浩 一 郎*

0. はじめに

伝統的な文法記述では、たとえば (1) の ce は un système を指示 (照応) し、また (2) の ce は André を指示 (照応) していると言われることが多い¹。

- (1) *Un système, c'est toujours borné.* (F. Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.159)
- (2) *André, c'est vraiment un ami.* (P. Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.165)
- (3) *Le mariage ? Il a été annulé.* (G. Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.292)
- (4) *Paris Hilton ? Mais elle est idiote !* (*Elle*, 13 juin 2005, p.110)

確かに (3) の il は le mariage を、(4) の elle は Paris Hilton を指示 (照応) していると言ってよい。しかし c'est における ce に、il や elle のような人称代名詞に匹敵するような指示 (照応) 機能が内在しているかどうかには、議

* 福岡大学人文学部教授

¹ 「指示」と「照応」は別個の概念であるが、記述の煩雑さを避けるため、本稿では「指示」という用語に統一する。概略「照応」は文脈上の「指示」であるとしておく。

論の余地が十分にある。

(5) *C'est Galtier qui déraille.* (F. Vargas, *Les jeux de l'amour et de la mort*, Édition du Masque, 1986, p.109)

(6) *C'est ce week-end que tu pars ?* (M. Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.198)

実際 (5) や (6) のような、いわゆる強調構文においては、ceは何も指示(照応)していない。つまり、強調構文の一部としてのceは、本来の意味での代名詞ではない。C'estにおけるceが、いつも指示(照応)の対象を持つわけではないのである。

本稿では、c'estにおけるceには、もともと積極的な指示(照応)機能が欠如しているという仮説を提案する。C'est Xにおいて、c'estはXが述辞であることを明示しているだけである。

1. 表意単位と対立

言語単位の成立は、他の言語単位との対立(つまり範列的關係)を前提とする。概略としては、複数の音・言連鎖(X, Y, Zと記号化しておく)を、より大きな言連鎖の一点で入れ換えて知的な意味の変化が生じるとき、その位置においてX, Y, Zが対立すると言われる(たとえば /ma/, /ta/, /sa/ に見られる /m/, /t/, /s/ の入れ換え)。対立はX, Y, Zが単に、互いに別の単位であると言うためだけの概念ではない。以下、表意単位について見ておこう。

表意単位(同じくX, Y, Zと記号化する)が成立するためには、他の表意単位との区別が必要である。表意単位はXであるかYであるかZであるか、複数の可能性があるときに限って、XであることやYやZであることに意味が

ある。仮に色彩に赤色しかなかったとしたら、その色を「赤」と呼ぶことに何か意味があるだろうか。そのような場合には、そもそも「色」という概念すら明確には存在しえないはずである。また、猫という動物に三毛猫しか存在しないとしたら、「猫」の指示対象は「三毛猫」のそれに等しいのだから、「三毛」の部分には実質的な情報がないことになる。「三毛」という表意単位が意味を持つためには、ペルシャ猫や黒猫や白猫など、他の猫の種類との区別が前提となっていなければならない。

文脈の条件づけなどによって論理的に X でしかありえないような場合は、Y や Z でないのはもちろん、それはいわば X でさえない。どれか一つでしかありえないのなら、X や Y、Z という区別そのものが無意味だからである。少なくとも X、Y、Z という区別があるときの X と、それがなくなるときの X は、別物と考えなければならない。

架空の A 言語が持つ果物の名称が「りんご」、「バナナ」、「メロン」の三つ、B 言語が持つ果物の名称が「りんご」、「バナナ」の二つ、そして C 言語が持つ果物の名称が「りんご」だけだと仮定しよう。このとき、A 言語の「りんご」、B 言語の「りんご」そして C 言語の「りんご」は、互いに別物であると考えなければならない。たとえば、A 言語の「りんご」が「メロン」との区別を含意しているのに対して、B 言語の「りんご」はそうではない。実際「りんご以外の果物を食べた」は、A 言語、B 言語、C 言語それぞれで意味が異なる。A 言語では「バナナあるいはメロンを食べた」を意味し、B 言語では「バナナを食べた」を意味する。C 言語における「りんご以外の果物を食べた」は (C 言語の枠内で解釈する限り) 意味不明の発話である。

ある文脈における区別の存在は、その文脈で知的な意味の変化をとまなう選択が可能であることによって保証される。X か Y か Z かを意図的に選べるということが、X、Y、Z の間に明確な区別があることを根拠づけるからである。また、ある文脈で X、Y、Z を入れ換えて知的な意味の変化が生じることは、そ

の文脈で X, Y, Z が対立することと同義である。

(7) *Il sort une pièce de sa poche.* (F. Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.2614)

(8) *Il faut sortir le Parti de la routine !* (T. Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.79)

表意単位の成立は、対立の存在を前提とする。言い換えれば、対立の存在を示さない限り、表意単位の抽出は不可能である。他のものとの入れ換えをして意味が知的に変化するという基準に依拠しないかぎり、表意単位と表意単位の間「切れ目」がどこにあるかを明確に判定する手段はない。

たとえば (7) の *il* は *elle* などとの入れ換えが可能で、またその入れ換えによって、文意に知的な意味の変化が生じる。このことから、(7) の *il* が表意単位として明確に機能していることが分かる。(7) の文脈での *il* に、他の表意単位との区別があることが保証されるからである。一方 (8) の *il* は他の表意単位との入れ換えができない。他の表意単位との対立が保証されていないのだから、この *il* には表意単位として成立するための基盤がないことになる。*Il* と *faut* の間に明確に切れ目を入れることができないという意味では、この *il* は *faut* という表意単位の一部であると言ってよい。少なくとも、*il* か *elle* かを選べる時の *il* とは別物である。実際 (7) の *il* が人称代名詞であるのに対して、(8) の *il* は非人称代名詞と呼ばれる。

2. 二種類の *c'est*

2.1. 他の表意単位と入れ換えが可能な *c'est*

たとえば (9) の *vous êtes un artiste* と *c'est un artiste* および (10) の *je*

suis un artiste に見られるように, c'est における ce が他の表意単位との対立を持つことがある (入れ換えて意味が知的に変化する).

- (9) Mais *vous* êtes un artiste ! Mais *c'est* un artiste ! (A. Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.250)
- (10) *Je* suis un artiste ! (T. Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p. 227)
- (11) *C'est* un écrivain français. (F. Beigbeder, *99 francs (14, 99 euros)*, Collection Folio, 2000, p.211)
- (12) À partir de maintenant, *je* suis un écrivain ! (K. Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.462)
- (13) Tu es de bonne humeur, *c'est* bien. (M. Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.75)
- (14) *Vous* êtes bien Jean-Luc ? (T. Benacquista, *Tout à l'ego*, Collection Folio, 1999, p.78)

また (11) の c'est un écrivain... と (12) の je suis un écrivain からは, このタイプの ce が他の表意単位と対立していることが分かる. (13) の c'est bien と (14) の vous êtes bien に関しても同様である. 他の表意単位と入れ換えることのできる, これらの ce は, 表意単位として成立するための前提条件を満たしている (1. を参照).

- (15) *C'est* difficile d'expliquer pourquoi. (G. Musso, *Seras-tu là?*, Collection Pocket, 2006, p.290)
- (16) *Il* est difficile de faire plus ridicule. (*Saga*, p.56)
- (17) *C'est* interdit de se laver dans la fontaine, savez pas lire ? (B.

Aubert, *Descentes d'organes*, Collection Points, 2001, p.34)

- (18) *Il était interdit de quitter l'autoroute jusqu'à notre destination.* (M. Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, p.121)
- (19) *C'est inutile que nous restions ensemble.* (T. Jonquet, *Comedia*, Collection Folio, 2005, p.304)
- (20) *Il est inutile que Veyrenc nous entende dans la chambre au-dessus.* (F. Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.230)

たとえば (15) や (16) のような構文においても、ce は il に入れ換えることができる。その点では、(15), (17), (19) の ce はそれぞれ、表意単位として成立するための前提条件は満たしていると考えられる (何らかの意味の区別を対応させることが可能)。ただし表意単位ではあっても、それが代名詞であるとは限らない²。

実際、この構文の一部としての ce は、何も指示 (照応) していない。この構文における ce や il に仮に指示対象があるとしても、ce と il の交換は指示対象が何であるかということに影響を与えない (ce と il の交換が可能なのは、指示対象を変化させるためではない)。したがって、この構文において ce と il の入れ換えが可能であるという事実は、少なくとも、それらが何かを指示 (照応) していることの論拠にはならない (4.1. と 4.2. を参照)。

- (21) *C'est très important d'apprendre à rompre en amis, [...].* (N. de Buron, *Chéri, tu m'écoutes?... alors répète ce que je viens de dire...*, Col-

² 代名詞には非人称代名詞もある。代名詞だからといって指示 (照応) の対象を持つとは限らない。

lection Pocket, 1998, p.24)

(22) Non, mais *c'est important que nous nous rendions chez lui*. (M. Chattam, *Le 5^e règne*, Collection Pocket, 2003, p.367)

(23) *Il est en colère*. (B. Aubert, *Transfixions*, Collection Points, 1998, p. 211)

たとえば (21) の *ce* が *d'apprendre à rompre en amis* を, (22) の *ce* が *que nous nous rendions chez lui* を指示 (照応) していると言われることがある。この考え方は正しくない。

(21) や (22) の *ce* に指示 (照応) 機能があると仮定したとしても、これらの *ce* は同一文中の「*de*+不定詞」ないしは「*que* 節」しか指示 (照応) することができない。また「*de*+不定詞」と「*que* 節」のどちらを指示 (照応) するかという選択があるわけでもない。しかし、指示 (照応) が成り立つためには、複数の選択肢が必要である。あらかじめ決められたものしか指示 (照応) できないとすれば、それはそもそも指示 (照応) とは言えない。指示 (照応) の対象があらかじめ決まっているのであれば、それを指示 (照応) する必要がないからである。たとえば *ça* という表意単位が *livre* だけしか指示 (照応) しないとすれば、この *ça* は代名詞ではなく、*livre* という表意単位の変異体だと考えざるをえない。(23) の *il* は Paul を指示 (照応) することもできれば、Pascal を指示 (照応) することも André を指示 (照応) することもできる。このように複数の可能性があるからこそ、指示 (照応) という現象が成り立つ。もし *il* が文法的に Paul しか指示 (照応) できないとすれば、*il* は代名詞というよりも Paul の変異体と見なさざるをえない。

2.1. 他の表意単位と入れ換えができない *c'est*

一方、いわゆる強調構文の一部である (24), (25), (26) の *ce* は、他の

表意単位と入れ換えることができない。

- (24) *C'est moi qui parle !* (A. Nothomb, *Métaphysique des tubes*, Collection Le Livre de poche, 2000, p.30)
- (25) *C'est M. Maurice que vous cherchez ?* (S. Japrisot, *La dame dans l'auto avec des lunettes et un fusil*, Collection Folio, 1966, p.233)
- (26) *C'est comme ça que j'ai connu M. Moreno.* (B. Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.49)

つまり、これらの *ce* は、独立した表意単位として成立するための要件を満たしていない（強調構文の単なる一部分）。強調構文の一部分としての *ce* は、何かを指示（照応）する機能を持ちえないと言ってよい。

- (27) *Ce n'est qu'une fois dans l'ascenseur qu'il peut laisser libre cours à sa peine.* (G. Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p. 263)
- (28) [...], *ça n'est qu'une fois cela fait que tu reprends toute ta lucidité.* (M. Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.256)

(27) と (28) に見られるように、この位置の *ce* を *ça* と入れ換えることが可能な場合もある。入れ換えができるのだから、何らかの意味の違いに対応する可能性もある。しかし (27) の *ce* と (28) の *ça* は、互いに自由変異体の関係にある（つまり同一の表意単位）。少なくとも *ce* と *ça* の入れ換えは、強調構文における指示（照応）現象に何の影響も与えない。

強調構文において *ce* が何かを指示（照応）すると仮定すると、この構文（*X est Y que... / qui...*）は普通のコピュラ文（*X est Y*）に、*qui...*あるいは *que...*

を加えたものと考えざるをえない (X と Y が何かを意味するのだから)。たとえば (25) のような場合、que は関係代名詞であることになる。他方 (26) のような場合、que は関係代名詞ではありえない。これは矛盾である。あるいは、たとえば (26) の *c'est comme ça* を通常のコピュラ文と考える限り、*que j'ai connu M. Moreno* の統辞的なステイタスは不明確となる。したがって、強調構文における *ce* が何かを指示 (照応) するという仮定は間違っていると考えざるをえない (4.1. と 4.2. を参照)。

2.3. まとめ

ここでの考察をまとめておこう。C'est における *ce* は、他の表意単位との入れ換えが可能なもの、それが可能でないものに分類することができる。この二つの *ce* は、互いに別物だと考えるべきである (1. を参照)。他の表意単位と入れ換えることができる *ce* は、独立した表意単位として成立するための前提条件を満たしている。ただし表意単位だからといって、それが代名詞であるとは限らない。一方、他の表意単位と入れ換えることができない *ce* は、独立した表意単位として成立するための要件を満たしていない。したがって、このタイプの *ce* は指示 (照応) 機能を持ちえない。

3. C'est における解釈としての指示 (照応)

指示 (照応) としての解釈が可能だからといって、そこに指示 (照応) と呼ぶべき言語現象があるとは限らない。また必ずしも、そこに代名詞があることを意味するわけでもない。

(29) *Le marbre c'est beau mais c'est froid...* (*Tout à l'ego*, p.25)

(30) *Je marque peu les gens, c'est vrai.* (*Tout à l'ego*, p.95)

- (31) *Ta mère, c'est une brave femme.* (S. Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.105)

確かに、たとえば (29) の *ce* は *le marbre* を、(30) の *ce* は *je marque peu les gens* を、そして (31) の *ce* は *ta mère* を指示 (照応) していると解釈することができる。しかし、このような解釈が可能だというだけでは、*ce* が指示 (照応) 機能を持つ代名詞であると結論することはできない。

- (32) *L'ennui, voilà le point commun de la jeunesse.* (*Elle*, 13 juin 2005, p.84)

- (33) *Tu es folle, voilà la vérité.* (S. Fontanel, *Fonelle est amoureuse*, Collection J'ai lu, 2004, p.62)

- (34) *Un emmerdeur, voilà ce que vous êtes.* (*Seras-tu là?*, p.70)

(32) の *voilà le point commun...* は *l'ennui* に関する言及であり、(33) の *voilà la vérité* は *tu es folle* に対する言及である。その意味では、*voilà* が *l'ennui* や *tu es folle* を指示 (照応) していると解釈することも不可能ではない。しかし、そのような解釈が可能だからといって、*voilà* が代名詞であるということにはならない。解釈と言語現実とは、あくまでも別物である。

- (35) *Quelle heure c'est ? Je vois plus mes montres.* (F. Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.186)

- (36) *Quelle heure il est ?* (M. Levy, *Sept jours pour une éternité...*, Collection Pocket, 2002, p.290)

実際、*c'est* における *ce* に関しては、それが何を指示 (照応) しているのか

が曖昧な事例が少なくない。たとえば (35) の ce は (36) のように、il (非人称代名詞) と入れ換えることができる。しかし、指示 (照応) の対象を持たない非人称代名詞との入れ換えが可能だというだけでは、(35) の ce が何かを指示 (照応) していることの論証にはならない。非人称代名詞との入れ換えしできないのは何故かという問題も残る。また (35) の ce の指示 (照応) の対象が、(36) の il のそれよりも明確な何かであるわけでもない。

(37) Vous êtes médecin, c'est ça ? (G. Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.150)

(38) On va rester amis, c'est mieux comme ça. (A. Abécassis, *Les tribulations d'une jeune divorcée*, Collection Pocket, 2004, p.207)

(37) の ça は vous êtes médecin を指示 (照応) していると解釈することができる。しかし (37) の ce が何を指示 (照応) しているのかを特定することは、意外に難しい。同様に (38) の ça は on va rester amis を指示 (照応) していると解釈してよいが、ce が何を指示 (照応) しているのかは必ずしも明らかではない。

(39) [...], quand je dis non, c'est non. (A. Abécassis, *Toubib or not toubib*, Collection Le Livre de Poche, 2008, p.249)

(40) — Que se passe-t-il ? [...]. — C'est mon père. Il... a eu une crise cardiaque. (G. Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.130)

(41) [...], mais dès que le beau temps s'installe, c'est déjà l'été. (*L'été meurtrier*, p.36)

(42) Seulement... heu... cinq gosses, c'est beaucoup de boulot en perspective. (*Les tribulations d'une jeune divorcée*, p.225)

(39) から (42) における *ce* に関しても、それが何を指示（照応）しているかは、かなり曖昧である。

ここでの考察をまとめておこう。C'est における *ce* が何かを指示（照応）していると解釈できる事例は、確かに存在する。しかし、そのような事例の存在だけでは、*ce* に指示（照応）機能がある（*ce* が代名詞である）と結論することはできない。指示（照応）そのものが単なる解釈にすぎない可能性を、排除できないからである。実際 *ce* の用例のなかには、それが何を指示（照応）しているのかが曖昧な事例が少なくない。この事実はまた、指示（照応）の対象が曖昧な現象を、そもそも指示（照応）と見なすべきかという問題を提起する。指示（照応）は、その対象が聞き手に明確に伝わるからこそ、指示（照応）なのではないだろうか。

4. 指示（照応）と同格・強調構文

4.1. 指示（照応）と同格

(43) の *libre et forte* も (44) の *très bouleversée* も、それぞれ、主辞の *elle* に対する限定である。また (45) の *soulagé* は *il* を限定している。

(43) *Libre et forte, elle est une héroïne de notre temps. (Elle, 21 février 2005, p.77)*

(44) *Elle est partie très bouleversée. (F. Vargas, Ceux qui vont mourir te saluent, Collection J'ai lu, 1994, p.162)*

(45) *Soulagé, il quitta le bistrot. (F. Vargas, L'homme aux cercles bleus, Collection J'ai lu, 1996, p.131)*

このような同格的な限定が *il* や *elle* に見られるのは、これらの *il* や *elle* が

代名詞で、何かを明確に指示（照応）しているからだと考えられる。指示（照応）の対象が明確だから、それに対する同格的な限定が成り立つのである。

(46) [...], il pleut comme vache qui pisse, [...]. (G. Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.180)

(47) Je sais, tu n'apprécies pas le café, mais *préparé ainsi* c'est délicieux.
(*Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, p.228)

実際 (46) の il のような非人称代名詞に、何らかの限定が加わることはまずないと言ってよい。非人称代名詞には指示（照応）の対象がないからである。

ここで、c'est における ce に対して何らかの限定が加えられる事例が、相対的に少ないという事実に着目しよう。(47) のような事例がないわけではないが、il や elle の場合と比べれば、頻度はずっと低い。この事実は、ce に積極的な指示（照応）機能がないことを暗示している。

(48) *Même habitée*, c'était l'archétype parfait de la maison hantée. (*Le 5^e règne*, p.216)

(49) *Tremblante*, c'est elle qui se décida à demander : [...]. (G. Musso, *Que serais-je sans toi?*, Collection Pocket, 2009, pp.304 – 305)

(48) の habitée は l'archétype への限定である。(49) の tremblante は elle に対する限定である。これらが ce に対する限定であるという誤解が生じにくいのは、ce に積極的な指示（照応）機能が欠けているためだと考えられる³。

³ (48) の habitée や (49) の tremblante が女性形であることは、本質的な条件ではない。

(50) C'est super d'avoir une sœur ! (*Ensemble, c'est tout*, p.501)

(51) C'est à l'Opéra de Paris qu'il a rencontré sa deuxième femme. (F. Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.138)

C'estにおけるceには、同格的な限定を加えることのできるものもあれば、それができないものもある。少なくとも、たとえば(50)や(51)のceのような、同格的な限定を加えることのできないceについては、そこには明確な指示(照応)の対象がないと考えてよい。明確な指示(照応)の対象が(少なくとも解釈として)想定されていれば、たとえば(47)でのように、それを限定できても不思議ではない(2.1.と2.2.を参照)。

4.2. 指示(照応)と強調構文

(52)や(53)のçaに見られるように、c'estにおけるceのなかには、強調構文で取り立てることが可能なものがある。

(52) La grande liberté que l'on a dans la musique c'est de la composer et au moins on peut toucher à tout, c'est ça qui est un bonheur. (Internet)

(53) Mais, bien sûr tu t'en rends pas compte, c'est ça qui est bon. (Internet)

(54) Je suis avocat stagiaire, [...]. C'est beaucoup de travail, couché à minuit, levé à l'aube... (F. Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.19)

(55) ??C'est ça qui est beaucoup de travail, couché à minuit, levé à l'aube...

一方, c'est における ce のなかには, 強調構文で取り立てることができないものもある. たとえば (54) をもとにした (55) は, 明らかに奇妙である.

(56) — Tu pleures ? [...]. — Non, c'est juste une poussière, et toi ?
(*Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, p.294)

(57) Ce soir, c'est la pleine lune. (N. de Buron, *Qui c'est, ce garçon?*,
Collection J'ai lu, 1985, p.175)

(58) C'est inutile de perdre votre temps : [...]. (*Du passé faisons table
rase*, p.157)

(59) C'est un peu pour ça que je suis venu. (S. Brussolo, *La fenêtre
jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.39)

同様に (56) や (57) のような文脈で, c'est の一部分である ce を強調構文で取り立てることは非常に難しい. また (58) や (59) の ce を, 強調構文で取り立てることができないことも自明である (2.1. と 2.2. を参照).

C'est における ce には, 強調構文で取り立てることのできるものもあれば, 取り立てることのできないものもある. 少なくとも, 強調構文で取り立てることのできない ce については, そこには明確な指示 (照応) の対象がないと考えてよい. 明確な指示 (照応) の対象が (少なくとも解釈として) 想定されるのであれば, たとえば (52) や (53) のように, それを取り立てることができて不思議ではない.

4.3. まとめ

C'est における ce のなかには, 同格的な限定を受入れるものと, 受入れないものがある. また C'est における ce のなかには, 強調構文で取り立てることができないものと, できないものがある. 同格的な限定を受入れない ce や, 強

調構文で取り立てることのできない *ce* には、明確な指示（照応）の対象がないと考えてよい。

5. *Ce* における指示（照応）性の弱さ

たとえば (60) に見られるように、人称代名詞としての *il* は単数の男性名詞（あるいは、それに相当する実体）しか指示（照応）できない。また (61) のように、人称代名詞の *elle* は単数の女性名詞（あるいは、それに相当する実体）しか指示（照応）できない。

(60) *L'Espagnol, il a perdu la tête ? (Dans les bois éternels, p.170)*

(61) *Je n'aime pas trop cette histoire. Elle me rend triste. (Les jeux de l'amour et de la mort, p.182)*

このように、指示（照応）の対象を選択するという性質が、人称代名詞としての *il* や *elle* に明確な指示（照応）機能を与えている。言い換えれば、人称代名詞の *il* には単数の男性名詞（あるいは、それに相当する実体）以外のものを排除する機能があり、*elle* には単数の女性名詞（あるいは、それに相当する実体）以外のものを排除する機能がある。何かを選択し何かを排除するということは、いわば指示（照応）機能そのものでもあると言ってよいかもしれない。

一方 *ce* には、男性か女性かの区別も、単数か複数かの区別も含意されていない。したがって、*ce* が何かを選択する機能は、*il* や *elle* の場合よりも弱いということになる。

(62) *Le problème, c'est mes collègues. (A. Gavalda, Je voudrais que*

- quelqu'un m'attende quelque part*, Collection J'ai lu, 1999, p.38)
- (63) *C'est étonnant la vie.* (*Les jeux de l'amour et de la mort*, p.111)
- (64) *Les chiffres, c'est mon truc. C'est de naissance.* (F. Vargas, *Coule la Seine*, Collection J'ai lu, 2002, p.119)
- (65) *C'est dur, les filles.* (*L'homme aux cercles bleus*, p.17)
- (66) *Écrire, c'est rater.* (*L'homme aux cercles bleus*, p.199)
- (67) *Ce que tu as fait, c'est une fausse bonne idée.* (*Et après...*, p.292)
- (68) *C'est bizarre comment fonctionne l'esprit humain, n'est-ce pas ?*
(*Seras-tu là?*, p.73)
- (69) *Tu es de bonne humeur, c'est bien.* (*La prochaine fois*, p.75)
- (70) *Mon portable sonne : c'est ma copine Daphné.* (A. Abécassis, *Au secours, il veut m'épouser!*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.22)
- (71) *Si tu aimes ce garçon, c'est ton affaire intime et ta responsabilité.*
(*Qui c'est, ce garçon?*, p.58)
- (72) *Il [=Franck] se rase. [...]. Franck grimaca. C'était l'after-shave.*
(*Ensemble, c'est tout*, pp.473-474)

また実際、たとえば (62) から (72) に見られるように、*ce* が指示 (照応) していると解釈できる対象は、非常に多様である。*C'est* における *ce* は、男性名詞か女性名詞か、単数か複数か、文全体か文の一部であるかを区別しない。解釈としては、*ce* はほとんどすべてのことに対応できると言ってよい。この事実は、*ce* には強い指示 (照応) 機能がないことを示している。排除できるものが少ないということは、選択する能力が相対的に弱いということでもあるからである。

6. おわりに

C'estにおけるceには、他の表意単位との入れ換えができないものと、できるものの二種類がある（2.を参照）。この二つのceは、互いに別物だと考えるべきである（1.を参照）。

他の表意単位と入れ換えることができないceは、独立した表意単位として成立するための要件を満たしていない。したがって、このタイプのceは指示（照応）機能を持ちえない（2.2.および4.を参照）。他方、他の表意単位と入れ換えることができるceは、独立した表意単位として成立するための前提条件を満たしている（2.1.を参照）。ただし表意単位だからといって、それが明確な指示（照応）機能を持つとは限らない（4.を参照）。

実際c'estにおけるceのなかには、指示（照応）の対象が何であるかが、不明あるいは曖昧な事例が少なくない（3.を参照）。またこのceという表意単位は、もともと何かを選択する力が相対的に弱い（5.を参照）。何かを選択することは、同時に何かを排除することでもある。ほとんどすべてのことに対応しうるceは、何かを排除する力が弱いから、必然的に何かを選択する力も弱い。

(73) *La cristallisation, c'est Stendhal.* (M. Dugowson, *Mina Tannenbaum*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.50)

(74) *L'individualisme, voilà notre véritable ennemi !* (B. Werber, *Les fourmis*, Collection Le Livre de Poche, 1991, p.56)

(75) *Il y a ton frère qui t'aime.* (D. R. Koontz, *Miroirs de sang*, Collection Pocket, 1977, p.144)

(76) *Bref, vous êtes coincée : travailler c'est la fatigue ; ne pas travailler, la déprime.* (N. de Buron, *Vas-y maman*, Collection J'ai lu,

1978, p.77)

以上の観察・考察に基づいて、c'est における ce には、もともと積極的な指示（照応）機能が欠如している（ce は代名詞ではない）という仮説を提起しよう。この仮説によれば、(73) の ce は la cristallisation を指示（照応）しているわけではない。(73) における c'est は、Stendhal が述辞であることを明示しているだけである（ce はこの c'est の一部分に過ぎない）。Stendhal が述辞であることさえ明示されれば、la cristallisation と Stendhal の意味関係は、何らかの整合性のある「解釈」によって処理すればよい。

代名詞を含まない、そして他の表意単位が述辞であることを明示するという二点において、c'est は (74) の voilà や (75) の il y a に匹敵する連辞である。(76) の la fatigue と la déprime の相違は、前者は c'est の存在によって述辞であることを明示されているが、後者はそうではないということにつきる。C'est の有無と指示（照応）の問題の間には、本質的な関係はないと言ってよい。

[参考文献]

- 小野正敦 (1985) 「照応に関する一考察」『フランス語学の諸問題』三修社, 204-219.
- MARTINET, André (1965), *La linguistique synchronique*, PUF.
- MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier.
- MARTINET, André (1985), *Syntaxe générale*, Armand Colin.
- 渡瀬嘉朗 (1990) 「定冠詞と「自己」照応形式 (その1)」『東京外国語大学論集』40, 65-78.